

## ゼフィルスの飼育法 1：各種共通事項

### 卵の保管

自然状態の卵は一般的に、日陰で風当たりの弱い場所に産卵されている。又、植樹の枝からの水分、降雨、夜露などによる水分の補給がある。卵の人工的保管のポイントは、この自然条件と極力近い条件を再現することにある。これがうまく行かないと、保管した卵の孵化率が極めて低くなったり、



極端な場合全滅する。

写真は人工採卵したメスアカミドリ

夏に母蝶から採卵した卵、秋から冬にかけて野外で採卵した卵の春までの保管法には、大別して2通りの方法がある。

**その1は、屋外保管法**である。卵の付着した植樹の枝を短く切って女性用ストッキング中に収納し、雨は当たるが直射日光は当たらない北側の常緑樹の下枝などに吊るす方法である。卵は比較的乾燥に強いが、乾燥気味の場所では適当な間隔で水を掛けることも行う。ストッキングは吊り下げ容器と卵を食害する外敵の予防用を兼ねている。産地、種類、数量などを書いたラベルを袋の外から見える位置に付ける事も管理上重要である。中身で膨らんだストッキングの

包みが枝からぶら下がっていると猫やカラスの興味を引きいたずらされる事もあるので、状況によりこの方法が取れないこともある。

一般種の場合、この方法で保管してきた卵も、2月に入れば以下に示す冷蔵庫保管に切り替えるのが普通である。屋外保管では卵が予想外に早く孵化する心配があるが、冷蔵庫法では孵化時期を確実にコントロールできるからである。

**その2は、冷蔵庫保管法**である。卵の付着した植樹の枝を短く切り、ティッシュでくるむか100円ショップで販売されているお茶パックに入れる。このパックを密閉タッパー中に収容し、冷蔵庫中で保管する。この方法では特に湿度管理が重要である。冷蔵庫の中は何もしなければ乾燥するし、逆に、特に春先は水分過多だと枝にカビが生え、放置すればやがて卵までがカビに包まれる。こうなると孵化率が極度に低下する。パック同士が密着しない程度にゆるくタッパー中に詰め、タッパー容器の底に1cm程度の長さのキャベツの芯を入れ、時々湿り具合の様子を見る。暖かい室内でタッパーを開けて点検すると、その時取り込まれた空気中の水分で冷蔵庫内では過湿となり、タッパーの壁面に水が凝縮するほ



ど過湿となるのでその分の考慮が要る。結露は都度ティッシュで吸収除去する他、タッパーの底にもティッシュを敷いておく。枝にカビが生えてしまった場合は、筆の先などで卵を剥落させない様気をつけてカビを除去する。予め昆虫用品販売店などで販売されているカビよけ剤を使用して、予

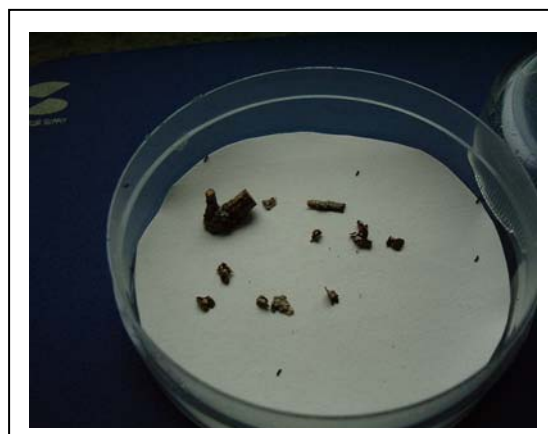
### 孵化の準備

植樹の新芽や花芽が膨らんで使用可能と判断された時点で、保管してきた卵を冷蔵庫から取り出し、孵化の準備に取り掛かる。卵の付着した枝や芽をカッターナイフで卵の周辺を出来るだけ小さく切り取り、ろ紙を敷いたプラシャーレに卵を上に向けて並べる。ろ紙に僅かな水分を与え、居室など温かい部屋の中に置く。容器に水滴が多く付着するようでは水分が多すぎ、カビを呼ぶ恐れがある。枝を小さく切るのは、孵化した幼虫が枝や芽に留まっていると見つけにくい為である。ろ紙は白く適当な厚みがあり、幼虫を見つけやすいので使用している。白い厚手の他の紙でも構わないが、ティッシュは中に幼虫が潜り込むので不適である。

湿度と温度を保たれた場合、健全な卵であれば普通1週間内外で孵化する。始めに卵の中心の精孔部に小さな孔が空くのが孵化の前兆であり、次第に孔が大きくなって幼虫が抜け出てくる。朝夕に孵化状況を確認し、孵化幼虫を見つけた場合、細く柔らかい筆の先を湿して掬い上げ、用意した植樹

防に努める方法もある。ヒサマツミドリシジミなど、特に花芽に産卵されたものはカビが生えやすいので注意が要る。平均的な孵化率は、野外採卵で60~70%、人工採卵はうまくすれば100%近いが、逆に全く孵化しないことも起こる。

の新芽につけてやる。



写真はエゾミドリ、孵化幼虫が這い回っている

幼虫数と抜け殻の数が合っている事を確認後、抜け殻を廃棄する。幼虫をつけた新芽の容器に、日付と幼虫数を記録しておく。

キリシマミドリシジミは特異な孵化性質を持ち、だらだらと孵化して長い場合は1月にも及ぶことがある。本種や何らかの理由で孔は開いたけれど幼虫がなかなか脱出しないなどの場合、卵を新芽に載せてやるとうまく孵化することがある。

## 若齢幼虫の飼育

孵化幼虫を付ける植樹新芽とその収容方法は色々であり、自分に適した方法を採用する。新芽の切り枝を使用して容器中で飼育する方法、鉢植えに放す方法、枝先に袋掛けする方法などである。

植樹の調達面から切り枝を使用したプラシャーレでの飼育が一般的であるが、注意することは、餌の補給・更新時に若齢幼虫を捨てたり潰したりして数を減らさないことである。

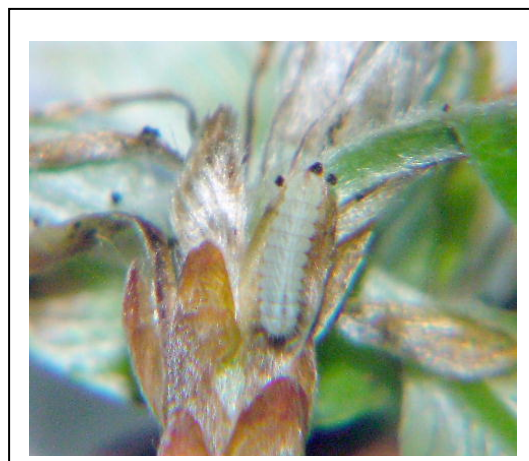
芽につけた数だけ幼虫を確認して餌を交換できれば良いが、特に初齢幼虫は小さく色も薄いので見つけ難い。古い芽に残って居たり、休眠芽を覆っていた鱗片状の鞘で脱皮休眠中のものを、見過ごして捨ててしまいがち。多数を飼育する場合は短時間で餌の補給をしたいので、一々幼虫数を確認するのは無理である。

新しい餌を容器に足して幼虫自からの移動に任せる方法が基本的である。残した古芽がカビを呼びやすく衛生的でないのが欠点である。この方法は、メスアカミドリなど幼虫が丈夫な種類に特に適している。古い芽は極力取り除き容器内を清潔に保持するように努めるが、取り除いた古芽も直ぐには捨てず、別容器で管理して幼虫の不在を確認する。

切り枝の根本を濡れたティッシュとアルミホイルで包んで水分補給をすれば、餌の交

換時期を延ばすことが出来る。標準サイズのプラシャーレで、10幼虫程度までの飼育数とする。

容器内切り枝飼育法の変形として、新芽を瓶挿しで使用する方法もある。背高のプラ容器中に新芽の瓶挿しを収容する方法であり、濡れたティッシュで根本を巻くより更に餌の持ちが長くなる。餌の更新時は同様に瓶挿しした新しい餌を接触するように並べて入れてやる。



写真上は3齢直後のヒロオビミドリ

どの方法であれ幼虫が3齢に達すれば大きくて見逃すことがなく、摂食量も多くなるので、次に述べる中齢幼虫以降の飼育法に移行する。

## 中齢以降の幼虫の飼育

容器内での切り枝飼育を行う。私は口径10cmのプラカップ（アイスクリームなどの透明プラスチック容器）を使用し、底にティッシュを敷き、その中に植樹の新葉と幼虫を入れ

る。ティッシュは容器内湿度の調整や糞の水分吸収、蛹化時にもぐりこむ隠れ家などの役を果たす。容器内へ収容する幼虫は、極力齢数を揃え、過密にしない。大きさに差があると小型幼虫はストレス受けるし、個体ごとに休眠脱皮時期が異なるので管理しにくい。過密飼育すると成虫は確実に小型化し、ウイルス病発生の危険度が高まる。4 齢幼虫で4 頭、終齢幼虫は2 頭程度を目安としている。食草量は多すぎれば容器内が過湿となるので、私の場合、2 日で食べつくす程度の量を補給している。餌の交換時には容器内を掃除してティッシュも新しくする。幼虫には直接手で触れず、付着した葉やティッシュを切り取って移動させる。こうして飼育を続け、蛹化までもって行く。幼虫は葉の裏、容器の壁、あるいはティッシュの中に潜り込んで蛹化する。

もし幼虫が口から黒い汁を吐いたり、体がグニャグニャしたり、異常に元気が無いなどの場合は、病気の疑いがある。その幼虫を単独隔離すると共に、その容器自体も残りの元気な幼虫共々、安全が確認されるまでは他から隔離する。ウイルス病の場合、飼育中の全幼虫が感染し、全滅の惨状を招くことがある。